

第22回連続講演会

荒川支流 旧芝川に学び、野川を考える旅～河川再

生活活動が生み出す環境学習～

3. ディスカッション

山本氏、彦坂氏、吉富先生、学生企画委員

学生A：河川再生活動が生み出す環境学習ということで河川再生活動がどのように「学習」に繋げていくのかということに焦点を当てまして、短い時間の討論会ではありますが、皆さんに参加していただきながら行っていききたいと思います。それに先立ちまして、今回企画しているのは多摩川エコモーションの学生企画委員と言いまして、このツアー自体も学生が中心となって企画したのですが、それとはまた別にもう一つ企画がありまして、「野川の生き物調査」というものを行っています。資料の中にも報告があると思いますが、その報告をこちらから、簡単ではありますがありますが、行いたいと思います。

学生B：先ほど、旧芝川で魚とりをさせていただいた者です。普段は、先ほど紹介があった通り「野川生き物調査隊」という名前で、野川で同じように生物調査を行っております。この「野川生き物調査隊」ですけれども、目的は「身近な自然環境を把握するということと、もう一つは、私たち大学生がこういう自然の中で学ぶという活動を周りの皆様に見てもらおうということがありますので、この2つの目的で行っております。具体的に、今日のような感じで大学から近くの野川までタモとかバケツとかを持って胴長履いたりして行って、昆虫とか魚とかあと季節の植物とかを観察する。そして、その他に写真、このような写真を撮ったりですね、また調査区間を決めて行きますので、そこに落ちているゴミを拾ったりして野川の環境についてもを総合的に見ようとしています。

学生C：私も今写真のようなことをやっていたんですけど、その時に地域住民の方が私たちの周りにきていろいろ話してくれて、その内容的には「もうちょっと下流に行ったら、カモがいるよ」とか、「この川にこんなに魚がいたんだ」とかいろいろ意見が聞けて、川に親しみを持っている住民の方がいたり、これから私たちの活動している姿を見て川に興味を持ってくれる方が増えるのではないかなと、思ってたんですけど。けど、この時に、子どもたちが来て「何で大人なのに川に入って魚捕ってるの？」って言われたんですね。子供たちに。（それに）ビックリして何も言えなくて、その時に。「えっ、なんでだろう？」とか思って、その時は「川の調査をしているから入っているんだよ」って言ったんですけど。きっと多分その子たちにとっては大人が川に入って調査したりするってことが、凄く多分不自然に思えたんだと思います。なんか、川は、子どもが遊ぶ所で、大人が入ってなんかやるところではないっていう。それは多分、大人たちのそういう活動を子どもたちが今、見たことがないからそういうことを言ったと思うんですね。皆さんは、活動されているので、子どもたちと一緒に活動をしていてこの辺の子達とかも川に親しみを持って、大人がやっているってことを見ながら立場が違うと思っていると思うんですけど、私たちが会った子どもたちはそういうことをまだ全然知らないの。子どもって言うのは、大人の姿を見て成長していくものだと思うので、これから私たちがもっと活動をしていけば、川に親しみを持ってそして環境学習へと繋がると思うのです。なので、その辺のことを皆さんと話せたらいいと思うのですが。

学生B：この（野川調査隊の）経験から私たちが話せるのは、先ほども

言ってもらったように、子どもって言うのは大人の姿を見て、環境への意識なり、自然環境への興味関心っていうのを増していくのではないかなと思います。ので、子どもたちに環境学習をさせよう、させようというように思うのも分かるんですけども、大人の方がもっともっと環境活動に参加してですね、「カッコいい姿」っていうものを子どもたちに見せていくっていうのが大事なんじゃないかなと思うようになりました。以上です。

学生A：今のような問題提起ではありませんが学生の側から子どもの環境学習には大人の環境活動を見せることが大事なのではないのかというのが我々学生の提案です。この件に関してお二方中心に答えて頂くかなという感じでこの部はやらせて頂きたいというように思います。と、ということで、コーディネーターの吉富先生にこれからの進行はお願いしたいと思います。

吉富：どうもありがとうございました。学生の皆さんから、野川に出かけていろいろな生き物の採捕活動をすることで、だんだんと野川のことが見えてきたという話がありました。講師のお二人の先生方のお話をこれから聞くんですが、その前に一つ、学生の皆さんは、生き物の調査ということで野川を見てきたんですけども、生き物以外で、例えば川の形のこととか、先ほど講師の方のお話にもありましたけれども水量のこととか、普段調査しているところがどんな風につながっているのか、下流にどんな場所があるのかな、上流がどうかな、など、考えたりはしましたか？

志賀氏：野川は上流が完全に護岸工事されていて途中から護岸の工事をされていないところに子どもたちが入ったりできるんですけど。国分寺駅の前のあたりが完全に護岸工事されているので、そこら辺の工事を壊して自然のままの状態にすれば、普通にいろんな人が接することができると思うので今後そういうところから取り組んで変えていければいいと思いました。

吉富：ありがとうございました。最初に彦坂さんから「ドジョウ池」を作った話がありましたが、実際に僕も総合学習で小金井や国分寺の小学校の出前授業を担当した時に行ったことがあるんですけど、すごく子どもが近づきやすいようないい場所になっているんですね。先ほどお話を聞いてその経緯が分かりましたけれども、そういう場所や機会を作るとは重要だと思うんです。今言ってくれたような、川にアクセスしにくいという問題、そして、チャンスがないという問題はあると思います。その辺のところを確保していくことは重要だと思いました。それでは、野川の話からになりましたので、まず彦坂さんの方から。学生の意見では「大人が環境活動をしている姿を子どもに見せるというのが重要」と言っていますが、現場でどのようなことを意識されているかを少し伺いたいです。

彦坂氏：最高齢者かもしれないそういうところで「孫」が自然を学ばなければいけない。そういう意味では、さっき子どもに端的に質問された「子どもが川で遊ぶんだ」という概念が子どもたちにあって、大人が入るのはなぜだろうって質問が出て、これは面白いことですね。でもこれはかつては親子でドジョウすくいして、子どもに教えたものなんですね。私らが泳ぐのを教えてもらったのも大人が教えてくれましたね。川とか池とかで。そういう大人と子どもの関わり合いがないっていうのは、これは一つ教育論の原点でもある生涯学習…大人が子どもを見て学ぶ（逆に大人が）子どもの質問に答える。これも学習なんですね。当たり前だと思ったことを子どもに質問されると、ドギマギしちゃってね、当たり前なのが語れない、つまりは大人と子どものコミュニケーションの場が浅いんですね。人間と人間の関わり合いは教育論の原点だから、

まず大人と子どもの接点を。大人の背中を見て育つというより、おじいちゃんの背中を見て孫が育つような時代ですけど、そのことが一つ、学習の問題。もう一つ川の国分寺の問題ね。20年、30年前頃まではずっとフェンスが野川にしてあったんですよ。で、親水公園あるいは親水護岸とか水に親しむことができる時代が来たんです。最初は危ないから入るなど、川と人間を隔てていたんです。もともと人間が川に関わる自然に関わるようなのが原点なんですね。人が入りやすいところを作るっていうことは基本的にはそういう概念です。但し三面護岸になっていますよね、国分寺は。ピシッとコンクリでこうなっちゃって。それで小金井に来ると開けてきますね。本当に地域によって川の顔が違う。で、それを国分寺の現状だったら、(野川に)降りられるようにしたいっていう市民の声があるならば、(会場に振る)国分寺の方、何か一言。

発言者 A: 国分寺市もね、あそこの野川を見ていただければわかると思いますけどやっぱり小金井とか下流の姿よりね、人工の川になっているので、直していくような働きかけをしていきたいと思います。

彦坂氏: それで私らはドジョウ池を作らせる運動を長いことやってきて実現できましたけれども、河川法改正になったとたん、東京都が、私らが言っているこういうところ=湿地帯に池作って、やろうと動いてくれました。時代を遡りますと、その時私らがドジョウ池を作って出来ましたっていうと、ほたる村以外の新しい組織の会議では、「あれはしちゃいけない」「これはしちゃいけない」という「いけないこと」ばかり言っているんですよ。そうでない、自由に入れるんだっていう、池に。

この間、トトロの森の事務局長に来ていただいたら、自由に自然に入れる、但し、ケガは自分持ちだよって(と聞いた)。そこまで責任が持てない。自分で自覚して持ちなさいっていう、のも教育論になる。危ないからって柵をしちゃったら、自分の危険度を知れませんよね。そういう意味での危険なところだと知らせるのが環境教育論の一つの道ではないかなと思います。池地は危ないですから、私らが池を作る時も論議がありました。この池で事故があったらどうするのか。市民側が言い出したんだけど、市民側が責任もつかないっていう、やっぱり製造者責任で東京都が最終的には責任ですけどね。東京都が掘った丸池では、下流の三鷹で人が死に損なったことがあったんです。そういう時にですね、(事故に対する)処置がしていなかったっていうことが法に引っ掛かりますし、最大限処置をしておかなければいけないのが行政責任。私らはそういう「いけない」「いけない」を省いて、自由に遊べるように造らせたのが、ドジョウ池の成果。それと責任は、普通は東京都が作った池だから東京都の管理者の電話番号だけ入れてある。ところが、市民団体の会長、これもこちら(鳩ヶ谷市南八丁目)でやっているように、自治会長をピオトープを作る会の会長に据えたんです。そうすると、(連絡先として会長の)自宅と市民団体の電話番号と東京都の電話番号と2つ並列で入れたのがドジョウ池なんです。最終的には東京都になるんだけど、自分たちが作ったんだという責任を持たせた。だから作る時に、子どもを参加させないといけないって思ったんです。大人あるいは行政が池作って、「さあ、遊びなさい」じゃダメだと。自分たちが作った池なんだから、自分ところの池に自分がはまり込むようなことはないんだから、それ(事故)を気を付けるためにという自覚の下で、市民団体の名前を看板に入れました。そういう自分は自分で守るんだっていう、市民側の自治の意識ですね、そういうことが環境教育の一つだと。これ、芝川の場合、問題ございます？

山本氏: ありますね。やはり川は危ない、川は怖い。で、自治会員全員に。「どうしたらいいですか」って、アンケートを取ったんです。その中に「川は危ないから行かない」「川は好きだ」とかいっぱい項目を書

きました。それにチェックをしていってもらったんですけど、やはり、「川は汚れる」とか「川は汚いから行かせない」とか。「危ない」っていうのが約半数ありましたね。「今後川がきれいになったら遊びに行かせますか？」という質問にもあったんですけども、その中にも約半数は「危ない」、「一人では行かせない」、「誰かがついて行けば行ってもいい」とか「ボランティアの人がいつも観察をしてくれ」と。そんなバカなことがあるか！自分の子どもなんだから、自分たちで行って遊ばせろ！っていう感もあるんですけど、やはり(集計の結果)半数でしたね。そういったところで、自治会の方は。

吉富: ありがとうございます。学生の方からも大人の活動を見せること、あと、場所や機会を作る話の中で、安全上の責任の問題を含めて、危ないということが強く意識されているということが出てきました。それに関連して「親子」というキーワードが出てきましたよね。子どもに見せるというより、親子で一緒にそういう場に触れる、ということについてどうでしょう？学生の皆さんは、大人の活動を子どもに見せるということとは別に考えていたのか、それも含めてだったのか、その辺意見はありますか？

学生 B: 私自身も魚捕りを小さい頃からやっているんですけども、親から教わりました。今回、親の姿を見せるっていうのを提案したんですけども、やはり、親子でやって頂くっていうのが実は一番いいかなって感じています。やっぱり自分の子どものことはよくわかっていて、何が得意で何が苦手かというのも分かっているし。それで、子どもが初めて川に入るっていうのは絶対危険だと思います。やっぱり最初の間は大人が教えてあげる。で、独り立ち出来てから、一人になるっていうのが一番いいのではないかなと思います。だから初めて入る子に一人で「入れ」っていうのはやっぱり無理だと思うので、誰かがどこかの段階で教えてあげるっていう機会を設けて頂けたらなって思います。

吉富: そうですね。やっぱり、まず親子でそういう場に触れることが大事なことですね。でも今はそういう機会自体も減ってきているということなんですか。それでは、今回のテーマのサブタイトルは「河川再生活動が生み出す環境学習」となっていますが、そういう再生活動に皆さんが関わられている中で、こういう部分が大切なんじゃないとか、こういう視点がまだ抜けているとか、今までの話をふまえて何か地域の皆さんからご意見など頂けたらと思います。

南八丁目住民: 今回の画面(『宇宙船地球号』第2弾)にも出ていたんだと思うんですけど、子ども会っていうのが地域にはあるんですね。子ども会さんの両親も含めて一緒に活動をお願いしたんです、共同で。貝とか採りに行くのもそれを埋めるのも、あそこ(ワンド)を掃除するのも。それは単なる一つの子どもの会かも知れませんが、それが学校に戻れば何個かのクラスに散るわけですよ。だからそういうことで少し話も広がるのかも知れませんが、そういうことを昨日したんだよってこともあると思いますので。まあ、子ども会と言えば一人ずつの親と一緒に付かない場合もありますよね。子どもさん何人かに対して何人かのお母さんたちだったりするわけだから、そういう団体さんも声をかけて方法もあったと思います。実際ウチらはやりましたよね。

山本氏: 補足ですけども、その子どもたちに川をきれいにしようっていう絵を書いていただきました。それを大きなパネルに直しまして、今も飾ってあります。川辺に。

吉富: どうもありがとうございます。貴重なご意見を頂いたと思います。子ども会から学校を通じて広がって行って、さらに地域の関係者へも発展して行くようですね。

地域参加者: 遊べればいいんですけど、あの川はまだ遊べるような状況

じゃないですけど。ただ、すごく汚かったんだけど、それを自分たちで「きれいにする」ことに関わったっていう思い出もあると思うんですよ。小さい時にはこの川は酷かったけど、「僕は貝を入れたのんだよ」とか「やったのよ」なんか、経験として残すという部分もあって最初に関わってっていうのはいいことだと思うんですけど。

吉富: 山本さんのお話の中ではそのような経験を絵にして残すということがありました。その辺にも少し関わりますが、川の問題っていうのは現場に行ってもわかりにくいことが多いと思うんですね。当たり前ですけど水が流れていてその中が見えにくいとか、ミクロなものから広大な場所までスケールもいろいろですよ。あと、変動することも大きな特徴です。増水したり水が溜れたりとか。そういう面でも捉えにくい対象ではあると思うんです。絵を描かれる彦坂さんのご経験から、その辺を伝えていく「工夫」と言いますか、上手く表現するという点について、少し伺えたらと思います。

彦坂氏: 自然との関わり合いは、幼児期から子どもを自然の中で育ててあげる。都市化になればなるほど、その必要性を私たちは感じてます。田舎の人でも今は自然では遊ばなくて、パソコンとかテレビゲームで遊んじゃう。その方が安易なんですよ。これが凄く危険だっていう警告が、最近社会教育全国大会でもありました。何歳からパソコンを使っているかとかいう…このことは大きな問題。かつてオオヤソウイチは、テレビは日本人を総白痴化させるぞと、大宅壮一は云った。極論を云うと、今パソコンをどういうふうに関係に活用するかっていうのは大きな課題だと思うし、自然環境と云うのはもっと生身で触れる学習だと思うんですね。私はパソコンを置いて、まず自然から学ぶことを第一にという方法を私は徹底したいですね。それには観察する。また、絵を描くっていうのは観察なんですよ。我々が毎日乗っている自転車。描いてみなさいって言ったって描けないんです、意外と。認識していないんです。認識と眺めるとの違いですが、認識っていうのは、観察すること、つまり絵を描くのと同じ。認識しないと絵は描けないんです。(絵は)「糸」へんに「会」うって書きます。理屈が会うってということなんですよ。論理的に図っていないと絵なんて描けない。で、これは幼児期の問題…またアート論になってしまって申し訳ないけど、幼児期は知識がなくとも感性だけで無心に描きます。その絵は非常に面白いんですけどね。だけど、知識が入ってくると、見た目の力で描写力が付いてきます。その技術がない子は、絵が嫌いになっちゃうんですね。頭の方が先行して見えてくけど描けないって。そのジレンマで絵が嫌いになるのが小学校2年生ぐらいから。本来そうじゃないんです。絵の教育論が悪いんですよ。観察する力は理科でも総合学習でも入ると思うんですね。観察するっていうのが生きる力の根源だと思うんです。昆虫のゴキブリですら凄く観察力があって、危機には素早く逃げるっていうから。ああいう動物の本性っていうものを我々は学べっていうのです。自然から学ぶ、自然の昆虫から学ぶ。だから子ども時代に昆虫採集っていうので驚きを与えてくれる。それを最近の子どもは、死んじゃうと「ああ、電池が切れちゃう」って言う話があるんです。要するに今の子は、電池で動くと思っているんですね。パソコンも電池ですもんね。そういう生命の本質がわかっていないから。「生命を学ぶ」時代に来たと思うんです。総合学習も本質的には、生命の根幹…そこから学習があってもいいと思うんです。そういう意味での自然から学ぶっていうのは大学の基本になってもいいと思うんです。ルソーの教育論ではないけれど「自然に帰れ」と。そういう時代がきているのではないかと思います。

吉富: 今「観察する力」という言葉が出ましたけれども、山本さんの方で、ボランティアとして現場に関わられて、学校の子どものこの辺

が変わったなあなどご自身で感じていらっしゃることは?

山本氏: さすが彦坂さん。絵描きさんだけあって観察が鋭いですね。今彦坂さん、ニューヨークに出品されていますね。日本中で絵を描いておられるんですが、私とは違った視野ですね。本当素晴らしいと思いますね。

私は直に子どもたちに接します。子どもたちの目を見ながら話をして、子どもたちの目の輝きを見ながら、今私が言っていることがわかってもらえるんだっていう話をしながら学校や自治会の中で教えてます。この自治会では、子どもたちと私たち自治会員が交わるっていうのは非常に多いです。例えば夏祭りっていうのがあって、この自治会はその太鼓を子どもたちに叩かせています。これは小学校4年生から全員が叩けるんです。全員が順番に櫓の上に乗って頂くようにしています。これを基にすると、今度は町で会っても子どもたちが役員にそれから教えてくれた先輩たちに挨拶ができるような環境を作っているんです。それが先ほど総務の副部長の桜井さん(当日討論会参加者)が言われたように、子ども会をいろいろな行事に引き込んで、一緒にどんなことでもいい、石ころひとつ拾うのもいい、花を一本植えることでもいいということ根強くさせていく。それが子どもの時やっただよっていう記憶に残してあげたい。ただ見てきたんじゃないで、自分たちもやっただよ。今私たちがこうやって育てていく青年たちはみんな太鼓を叩いているんです。子どものときには盆踊りの太鼓を叩いたんだっていう記憶があるんですよ。そういったものを残してあげたいですね。子どもたちに大人になったときに。「小さかったときには夏祭りがあったんだよ」、「その時川もきれいにしたんだよ」、「その時私たちは」さっきも言いましたけど「貝を入れたんだよ」、「その貝から卵が産まれたんだよ」。そういう少しでも心に残ることを自分で体験させてあげるっていうのが、今私たちがこの自治会の役員としてやっていることで一番大切じゃないかな。そんなことを私たちは思っております。

吉富: ありがとうございます。環境教育を行う上で経験として残るものを与えるということは重要だと思います。先ほど会場の方のお話にもあったように、活動を親子から、子ども会、更に学校や地域へも広げていくというように、人の関係を作っていくことについて、いろいろな観点から話題が広がってきました。他にも何かお気づきになった点があれば、会場の方から少しお聞きしたいのですが。何かありますでしょうか。

発言者B: 今回のこのプログラムの一番の大きなテーマとなっています、「河川の再生」というのが大きなテーマがありまして…。それでこのテーマを最初に見た時に実際に今回、旧芝川という川自体の存在もあまりよく知らなくて訪れたこともなかったんですけど、実際旧芝川という川を地元の方々が「河川」として再生させようという試みをしているということを知った時に、一体「再生されるべき、取り戻すべき川の姿」、つまり理想の姿というのはどんなものかなっていうのをすごく考えました。実際に来てみて、その前にテレビの放映の映像から綺麗になる前、汚かったころの川の様子を見て、これがここまできれいになったんだっていうのに凄く驚いて…実際魚がなんだけ戻ってきているということにまず凄く驚きました。それで実際にこれから「どういう川」を目指していくのかっていうことを考えた時に、残念ながら、私もですけど、この川が川本来の姿を見せていたころの様子っていうのは知り得ないですし、先ほどの秋元さんですとか昔の方の話から想像するしか術はないんですよ。そのころと今の河川の周りの生活環境とか状況っていうのは大幅に違っているはずですから、必ずしもその数十年前の姿がそのまま取り戻すべき姿とは言えないと思うんですよ。で、そんな時に川というものをイメージするいろんな素材とかある中で、今日は

学生さんたちが実際に川に入って採集をされていて、捕った魚を見て、ゴカイが入っていたりですとかハゼがいたりですとか。海の生物がここまで川に入ってきているということを知った時にそこで初めてこの旧芝川っていうのは海とつながっているということを凄くイメージできました。ということで、川を取り戻すときにはどういうイメージに向かって活動していったらいいのかっていうのが凄く重要になるんじゃないのかなっていうことを強く感じました。それで、実際に・・・たとえば学生さんが採集をされていて、生き物を見てみて・・・まずその魚、水の中の生き物からみた場合にこの川のイメージっていうのを・・・たとえばモデルになる川があるですとか・・・、今の生き物の組成とか種類から言ってしまう川っていうのが目指す姿に近いのではないかなとか・・・何か恐らく実際に魚を捕ってみてイメージしたり考えたり感じたりされたりしたことがあるんじゃないかなと思いますので、その辺を少し伺えればと思います。

学生 B: 先ほど魚を捕ってみてですね、今言われた通りですね、海の魚がいるんですね。今日捕ってみて一番驚いたのが、マハゼがいたことですね。マハゼがいるっていうことは海から来ているってことなんですね。やはり、昔の川の状況が分からないところで、どういう川を理想にしようかいうときにですね、一番手っ取り早いというかこの今の旧芝川の・・・河川の下流域で重要なのが海とのつながりだと思うんですね。私も卒論で下流域の生物を扱っているものでして・・・。やはり海と川が分断されているっていう状況が良くない。今芝川はちょうど潮が満ちてきているんですね。こういう潮の満ち引きも見えるという川ですね。海と川がつながっているというのは河川に一つの重要な要素になってくるのではないかなと思います。で、下流域なのでいくら頑張っても、やはり川の下流ということで、これが清流になるっていうことは難しいと思います。ですので、やはり海とつながっているというところを重要視して頂けると評価できるのではないかなと思います。

吉富: ありがとうございます。今、どんな川の姿を求めながら活動をしていくべきかという話になってきました。では、残りの時間が無くなってしまったので、お二人からそのあたりについて最後にお話を聞きたいと思います。河川の再生あるいは環境学習において目指して行くべき目標・・・そのあたりについて少しご意見を頂ければと思うのですが。

彦坂氏: 自然再生という問題と都市河川という問題のギャップ。これフィードバックできない・・・。だから、再生ってなんだろうっていう疑問点があると思うんですね。で、将来目指すための問題っていうのは、かつての自然にはまず不可能だろうっていうっていう意味で言われたのだと思うのですがね。だけど、魚が帰ってきているんじゃないかと。そのことに目を見張ったと、私は驚きました。まず水そのものが良ければ魚も帰ってこれるだろう。それを原点にした環境づくり。だから私らも最近野川をね、自然再生法・・・国が定めた時に、新聞では野川は創出と書いていましたよ。自然を創り出すとはおこがましい話ですけどね。本来現具的に言うとな、自然そのものがいかにどんな仕組みであるかっていうことが、本当に最近複雑系そのものが自然環境だと思うんですね。最終的には生命が生きられるという環境に原点があるなど。その原点が川に象徴され、そこで子どもたちに学習するには、私は野川は学習の宝庫であると。枯れる野川であるけれども枯れたらどうなるんだという大きな問題もありましたけれども。今、芝川の場合は、水が枯れるということはまずなさそうですけど、都市におけるヘドロ問題は下水道を完備すれば何とかなるんですよね。これ、人為的にできることなの。お金がかかるけれども。だけど、壊した人類がやったことは人類がお返しをしなくてはならない。これはもう本当に自然を元に返すとかがどれだけで

きるかが我々の次の世代に課せられた課題だと思っています。

山本氏: 最初は、正直言って「川の淵を歩ければいいな」ってみんなです。本当にこの川の淵を歩けるだろうか。「歩けるような川になったらいいな」「散歩ができる川になったらいいな」っていうのが目標でした。しかし、歩けるようになりました。川に魚が帰ってきました。じゃあ、この先何を考えるかっていったら、先ほど秋元さんが言いましたけれども、入ってくる水がきれいであれば(旧芝川)もっときれいになる。間違いなくこれはきれいになります。でも、今私たちがやるべきことは、「今落ちているゴミを捨てない」、「川にゴミを捨てない」っていう川を作ろうか。それが目標ですね。もうこれ以上水自体をきれいにするのは、努力し尽くしたんじゃないかと思うくらいし尽くしています。ただ、酸素が足りないんですよね。川に必要なのは「瀬」と「淵」ですが、瀬がないために酸素が非常に不足しています。もう少し酸素が入れば微生物ももう少し活発化してですね、もう少し(川が)きれいになるのですが。そのために今、堅川・・・先ほどありましたドブ川から流れ込んでくる川の部分に瀬というか・・・大きな石をゴロゴロ入れてですね、酸素を補給する装置を今作ろうとしています。これを(県に) やって頂ければ、だいぶ酸素も補給できるでしょう。まあ、もっと単純に言えば、エア(air)のね、金魚のブクブクでもいいから放り込んであげばきれいになるんですけど。そういう金のかかることはやめて、自然に酸素を取り入れて微生物を活発化させてきれいにしていこうという努力はしています。私たちができることは、先ほど言ったように、この里親制度をガッチリ利用してね、きれいな川・危くない川・川の水は多少汚くても、川の淵まではいける川・ガラスのかけらの落ちこたない川ですね。裸足で歩いて大丈夫くらいなまでを目標にして、この川に取り組んでいきたいと思っています。

吉富: どうもありがとうございました。お二人から貴重なご意見頂きました。自分たちでやれることからスタートしても、取り組みにはいろいろな視点があると思うんですね。自然再生のことを例に、そのような活動の中で環境学習の目標をどう定めていくか、沢山の視点が見えて来たいと思います。最初に学生の方から「大人が環境活動をする姿が子どもたちに影響を与える」というような話があって、そこから子どもたちだけでなく、親子の関係が大事という話、その中で安全面の問題も出ました。親子で関わって、それを子ども会などを通じてどんどん広げて普及させていくような、そういう人のつながりも重要ということですね。そういうプロセスの中では、観察する力を養うとか心に残る経験を促すことが重要ということも学びました。「大人が子どもに」というよりは、もう少し双方向的といいますか大人の方も影響を受けるわけですよね。現場で子どもといろいろなことを経験することで、目標に向かっていく意識みたいなものも共有していけるんじゃないかなと少し感じました。最初に学生の方から問題提起がありましたけれども、今、会場の皆さんや講師のお二人のお話を聞いて、最後に学生の方から今日どんなことを考えたのか、時間の関係もありますので、最初に学生の方から感想などを聞いて、その後折角の機会ですから、講師のお二人に「これから大学生に期待すること」を伺いたいと思います。

学生 A: 短い時間でしたが、(講演した)先生方や皆さんからお話を聞けたというのは非常に有意義な時間だったと思います。これまで僕たちの考えでは大人から子どもへ一方的ではありませんけど、年長者から年少者へ知識の伝達というのを中心的に考えていたと思います。(学芸大は)教育学部なので教員志望が多いもので、先生がいて子どもがいる。それで先生から子どもに教えるのを主に考えていたかなと、いう面はあります。それで、今日お話を聞いて、相互に勉強し合っているのだ

などというのを感じました。あと、親子関係というのは、これから先も問題にはなると思うのですが、ちょっとそこまで思いつかなかったというのは、大学生の側としてあります。教育学部なので基本的に、「学校と子ども」という二項関係で考えるという傾向があるんですけど、子ども会とか…僕も思いつかなかったんですね。自分が小学校の時は当たり前のように地区に子ども会がありましたけれども、中学校・高校・大学と上がっていくにつれて子ども会の存在を忘れてしまうんですね、僕らは。まあ自分の子どもができてまた地区に戻るとなると、子ども会の存在というのは再認識されるとおもうんですけど。今そういうのがあったなとフツと思えました。今日一日通して大学生活では味わえないようないろいろな意見とか聞けて、とても有意義な時間を過ごさせていただきました。ありがとうございました。

吉富: 学生の方から、今日の議論を通じて視野が広がって、川との関わり方を改めて考え直すことができたということでした。そういう大学生に対してですね、講師のお二人から期待することを最後に聞いて終りにしたいと思います。よろしくお祈いします。

彦坂氏: 今私ら（ほたる村）は本当、団塊の世代から上の人がほとんどなんですね。だから若い人たちに世代をバトンタッチ…私たちは「清流を未来にリレーする」というキャンペーンを立てているわけです。お気づきのように。そういったところで次の世代にどのように伝えるべきか。我々は自然遺産をいかに残すかと地域に呼びかけておりますけれども、その中核で学術的な学際レベルでの教育論がないと行政は動きません。だから、今の大学の方たちが教育の中で、やっぱり行政を指導していけるような人材育成を期待しております。かつての野川も30年前は、「素人が何を言っているんだ」と、一掃されたらしいです。そういう時代があったんです。それで専門家に委ねすぎていてダメになったりもした。これは学術的にもタテ割り社会だと思います。だから、あらゆる学問が統合されなきゃいけない。一分野だけではなく、医学から哲学から社会学から。多摩川エコモーションは、持続可能な社会作りと謳っていますね。PTAとか子ども会とかさっき言っていましたが、地域がどんなふうに学校支援をするか、子どもに同時に地域の人たちに教えられるか。そういう住活（住民活動）の中で大学がそれをまとめる。これにより持続可能な社会づくりのポイントをもっているのではないかと。そういう意味で学生さんのエコモーションの持続可能な行動を期待しております。

山本氏: 皆さん今後先生になるという方たちばかりなので。そういった大学生たちに期待することは、素直な子どもを育ててほしいんですよ。偏らない子どもを育ててほしい。で、自分から進んで物事ができる子どもたちを教えてほしいような教育をしてほしい、難しいことなんですけど。是非、そういった偏らない子ども、何でも好きなものは好き、嫌いなものは嫌いとはっきり言える子どもを育ててほしいな。それが私から皆さんへのお祈いです。今後教育者としてお祈いすることですね。是非、それを貫いてほしいと思います。自分の意志で子どもを育ててほしいと思います。お祈いいたします。

吉富: どうもありがとうございました。本当は会場の皆さんからもう少し話を聞いてディスカッションを続けたかったのですが、時間がなくなってしまいました。今日は現場を見る経験も出来ましたし、川をテーマに議論もでき、いろいろつながりをつくる機会にもなったのではないかと思います。今後これをきっかけに川の活動に皆さんさらに積極的に参加して頂けると嬉しいと思います。今回はこれで終了したいと思います。もう一度二人の講師の先生方に拍手を。